

源氏物語

匂宮

紫式部

青空文庫

春の日の光の名なごり残花ぞのに匂にほひ薫かをると

思ほゆるかな

(晶子)

光ひかるきみ君がおかくれになつたあとに、そのすぐれた美貌びぼうを継ぐと見える人は多くの遺族の中にも求めることが困難であつた。院の陛下はおそれおおくて数に引きたてまつるべきでない。今の帝みかどの第三の宮と、同じ六条院で成長した朱雀院すざくの女三によさんの宮みやの若君ふたりの二人がとりどりに美貌の名を取つておいでになつて、實際すぐれた貴公子でおありになつたが、光源氏がそうであつたようにまばゆいほどの美男というのではないようである。ただ普通の人と

してはまことにりっぱで艶な姿の備わっている方たちである上に、あらゆる条件のそろった身分でおありになることも、光源氏にやや過ぎていて、人々の尊敬している心が実質以上に美なる人、すぐれた人にする傾向があつた。紫夫人が特に愛してお育てした方であつたから、三の宮は二条の院に住んでおいでになるのである。むろん東宮は特別な方として御大切にあそばすのであるが、帝もお后もこの三の宮を非常にお愛しになつて、御所の中へお住居の御殿も持たせておありになるが、宮はそれよりも気楽な自邸の生活を喜びになつて、二条の院におおかたはおいでになるのであつた。御元服後は三の宮を兵部卿の宮と申し上げるのであつた。女によいち一みやの宮は六条院の南の町の東の対たいを、昔のとおりへやに部屋

の模様変えもあそばされずに住んでおいでになって、明け暮れ昔の美しい養祖母の女にょおう王を恋しがっておいでになった。二の宮も同じ六条院の寢殿を時々行ってお休みになる所にあそばして、御所では梅うめつぼ壺をお住居に使っておいでになったが、右大臣の二女をお嫁めとりになっていた。次の太子に擬せられておいでになる方で、臣下が御尊敬申していることも並み並みでなくて、その御人格も堅実な方であった。

源右大臣には何人もの令嬢があつて、長女は東宮に侍して、競争者もないよい位置を得ているのである。下の令嬢はまた順序どおりに三の宮がお嫁めとりになるのであると世間も見ているし、
中ちゆうぐう宮もそのお心でおありになるのであるが、兵部卿の宮にそ

のお心がないのである。恋愛結婚でなければいやであると思つておいでになるふうなのであつた。夕霧の大臣も同じように娘たちを御兄弟の宮方に嫁とつがせることを世間へはばかつていたのであつたが、もし懇望されるなら同意をするのに躑ちゆうちよ躑ちゆうちよはしないといふうを見せて、兵部卿の宮に十分の好意を見せていた。大臣の六女は現在における自信のある貴公子の憧どうけい憬けいの的になつていた。六条院がおいでにならぬようになってから、夫人がたは皆泣く泣くそれぞれの家へ移つてしまつたのであつて、花散里はなちるさとといわれた夫人は遺産として与えられた東の院へ行つたのであつた。中宮は大部分宮中においてになつたから、院の中は寂しく人少なくなつたのを、夕霧の右大臣は、

「昔の人の上で見ても、生きている時に心をこめて作り上げた家が、死後に顧みる者もないような廃邸になつてゐることは、榮枯盛衰を露骨に形にして見せている気がしてよろしくないものだから、せめて私一代だけは六条院を荒らさないことにしたいと思う。近くの町が人通りも少なく、寂しくなるようなことはさせたくない」

と言つて、東北の町へあの一条の宮をお移しして、三条の邸やしきと一夜置きに月十五日ずつ正しく分けて泊つていた。二条の院と言つて作りみがかかれ、六条院の春の御殿と言つて地上の極樂のように言われた玉の台うてなもただ一人の女性の子孫のためになされたものであつたかと思へて、明石夫人あかしは幾人もの宮様がたのお世話をし

て幸福に暮らしていた。夕霧はどの夫人に対しても院がお扱いになつたとおりに、皆母として奉仕しているのであるが、紫の女王がこんなふう^にに院のおあとへ残つておいでになれば、どんなに自分^はは誠意をもつてお尽くしすることであろう、終わりまで特別な自分の好意というものを受けてもらえるというよう^なことはなかつたと思うと、今も大臣は残念でならぬように思うのであつた。

天下の人で六条院をお慕いせぬ者はなくて、何につけても火が消えたように思つて歎^{なげ}かぬおりはないのであつた。まして院に親しくお仕えしていた人たち、夫人がた、宮がたが院にお別れした悲しみに流す涙というものはどれほどの量であるかしのれないのである。それとともに今も紫夫人を追慕する思いはだれにもあつて、

人からその女王の思い出されていない時というものはないのである。春の花の盛りは短くても印象は深く残るものであるというベ
 きであろう。

二品の宮の若君は院が御寄託あそばされたために、冷泉院の
 陛下がことにお愛しになった。院の後の宮も皇子などをお持ちに
 ならずお心細く思召したのであったから、この人をお世話あそ
 ばして老後の力にしたいと望んでおいでになった。元服の式も院
 の御所であげられた。十四の歳であった。その二月に侍従になつ
 て、秋にはもう右近衛の中將に昇進した。推薦権をお持ちになる
 位階の陞叙もこの人へお加えになつて、なぜそんなにお急ぎ
 になるかと思うようにずんずんと上へお進ませになるのであった。

お住居の御殿に近い対をこの人の曹司ぞうしにおあてになつて、裝飾などは院御自身の御意匠でおさせになり、若い女房から童女、下仕えの者までもすぐれた者をお選りよりとのえになつた。人が姫君をかしづく以上の華奢かしやな生活をおさせになるようでもまばゆく見えた。院のおそばの女房の中からも、後の宮の女房の中からも容貌ようぼうのすぐれた、感じのよい、品のある女は皆中將の曹司付きにあそばされ、院にいることがどこにいるよりも好きになるようにとお計らいになつたのであつて、うれしい玩具品がんぐひんのように思召すのであつた。亡なくなつた太政大臣の女御によこの腹からだただお一方の内親王がお生まれになつたのを、院が非常に珍重あそばすのに変わらさず中將をお扱いになるのである。それは一つは後の宮をお愛しにな

ることが年月とともに増してゆくことによるものらしくて、それほどまでにはと話を聞いては人が信じないほど中将を院はお愛しになった。

現在の母宮は仏勤めをばかりしておいでになって、月ごとの念仏、年に二度の法華ほっけの八講、またそのほかのおりおりの仏事などを怠らずあそばすだけがお役目のようで、出入りする中将をかえって御自身のほうが子のように頼みにしておいでになったから、お気の毒でおそばにもいたかつたし、院からも、宮中からも始終お呼ばれはするし、東宮も御弟の宮がたも親友のように思召していつしよにお遊びになろうとされるしするため、暇がなく苦しい中将は一つの身を幾つかに分けて使うことができぬかとさえ歎た

息んそくしていた。時々耳にはいつて、子供心にも腑ふに落ちず思つたことは、今も不可解のままに心に残っているが、尋ねる人もなかつた。宮にはそうした不審をいだいているとさえお思われるところとはばかられる問題であつたから、ただ自身の心のうちでだけ絶え間なくそのことを考えて、

「どういふことから自分が生まれるようになったのか、何の宿命でこんな煩悶はんもんを負つて自分は人となつたのか、善巧ぜんぎょう太子はみずから釈迦しゃかの子であることを悟つたというが、そうした知慧ちえがほしい」

と独言ひとりごとをする時もあった。

おぼつかなたれに問はまし如何いかにして始めも果ても知らぬわが身ぞ

返事はだれもしてくれない。自身の健康などもこんなことでそこなつてゆくような気がして中将は歎なげかれるのであつた。宮が六年の若盛り若に尼ににおなりになつたのも、いつたいどれほどの信仰がおありになつたために、にわかにに出家を断行あそばされたのか、自分の生まれてくることが不祥なことであつたために、厭えんせい世的なお氣持ちにもなられたのであろう、人がその秘密を悟らずにいとく思らわれない、暗闇くらがりに置くべき問題であるから自分には人が告げないのであろうと中将は思つた。朝暮あけくれ仏勤めはしておい

でになるようではあるが、確固とした信念がおありになるとは思えない女の悟りだけでは御みほとけ仏の救いの手もおぼつかない、五つの戒めも完全に保っておゆきになれるかも疑問なのであるから、自分がその精神だけを補うことにして、後世だけでも御安楽にしてさしあげたく思った。この人はお崩かくれになった院も、自分というものために不快な思いにお悩まされになったかもしれぬと思うと、次の世界でももう一度お逢あいしたいという望みが起こり、元服して社会へ出ることを厭いとわしがったのであるが、意志を通すこともできなくて、出仕する身になった時から、八方のはなやかな勢いがこの人を飾ることになっても、これはうれしいとは思われないで、ただ静かな落ち着いた人になっていた。帝も母宮の御

縁故でこの中將に深い愛をお持ちになつたし、中宮はもとより同じ院内で御自身の宮たちといつしよに生おい立つて、いつしよにお遊ばせになつたころのお扱いをお変えにならなかつた。

「末に生まれてかわいそうな子です。一人前になるまでを自分が見てやることもできない」

と、院が仰せられたことをお思いになつて、憐あわれみを深くかけておいでになるのである。夕霧の右大臣も自身の公きん達だちよりもこの人を秘蔵がつて丁寧ていねいに扱うのであつた。昔の光源氏は帝王の無二の御愛子ではあつたが、嫉妬しつとする反対派があつたり、母方の保護者がなかつたりして、聡明そうめいな資質から遠慮深く世の中に臨んでおいでになつて、一世の騒乱になりかねぬようなことになつた時

も、いさぎよく自身で渦中かちゆうを去り、宗教を深く信じて冷静に百年の計をされたのである。この中将は若年ですであらゆる条件のそろつた恵まれた環境に置かれていた。そしてそれに相当した優秀な男子でもあるのである。仏が仮に人として出現されたかと思われるところがこの人にあつた。容貌ようぼうもどこが最も美しいといふところはなくて、目を驚かすものもないが、ただ艶えんで貴人らしくて、賢明らしいところが万人に異なつているのである。この世のものとも思われぬ高こう尚しょうな香を身体からだに持つているのが最も特異な点である。遠くにいてさえこの人の追い風は人を驚かすのであつた。これほどの身分の人が風采ふうさいをかまわずにありのまま中人へ出るわけはなく、少しでも人よりすぐれた印象を与えた

いという用意はするはずであるが、怪しいほど放散するにおいに
 忍び歩きをするのも不自由なのをうるさがつて、あまりたきもの薫香な
 どは用いない。それでもこの人の家にしま蔵われたたきもの薫香が異なつた
 高雅な香の添うものになり、庭の花の木もこの人の袖そでが触れるた
 めに、春雨の降る日の枝の雫しずくも身にしむ香を放つことになつた。
 秋の野のだれでもないふじばかま藤袴はこの人が通ればもとの香が隠
 れてなつかしい香に変わるのであつた。こんな不思議な清香の
 備わつた人である点をひょうぶきよう兵部卿の宮は他のことよりもうらやま
 しく思おぼしめ召して、競争心をお燃やしになることになつた。宮のは
 人工的にすぐれた薫香をお召し物へお焚たきしめになるのを朝夕の
 お仕事にあそばし、御自邸の庭にも春の花は梅を主にして、秋は

人の愛する女おみなえし郎花、小男鹿さおしかのつまにする萩はぎの花などはお顧みにならず、不老の菊、衰えてゆく藤袴、見ばえのせぬ吾木われもこう香などという香のあるものを霜枯れのころまでもお愛し続けになるような風流をしておいでになるのであった。昔の光源氏はこうしたかたよつたことはされなかつたものである。

源中將は始終宮の二条の院へお伺いするのであつて、音楽の遊びの行なわれる時にも優越を誇るような笛の音を吹き立てる相手を、互いに好敵手と認める若いどうしであつた。世間も黙つてはいなかつた。匂におう兵部卿、薫かおる中將とやかましく言つて、すぐれた娘を持つ貴族たちはこの貴公子たちを婿に擬して、好奇心の起るようにしむける者もあるのを、宮は相手の女の価値を相当な

ものと考えられる人へは手紙を送つてごらんになつて、なお細かく相手を観察しようと思はれるのであつた。しかも熱心にだれを得なければならぬとお思ひになる女はなかつた。冷泉院れいぜいの女にょいち一の宮みやと結婚ができたらしいであろうとにおうみや宮みやがお思ひになるのは、母君の女御も人格のりっぱな尊敬すべき才女であつて、姫君もさもあるはずにすぐれた評判をとつておいでになる方だからである。遠くからの評判だけではなく匂宮は姫宮のおそばにいる女房から細かな御様子を聞いてもおおいでになるのであつたから、忍びがたく恋のようにも今ではなつていた。

中将は人生を味気ないものと悟つているのであるから、寂しいからといって、恋愛などをしては、かえつてこの世を捨てる際の

妨げになるであろうということを知っていて、保護者との関係の煩瑣はんさな女性に求婚するようなことははばかられるのであった。自身では永久にこの冷静な態度が続けられるものと思っていたであろうが、それはただ現在の薫中将が熱情をもつて愛する人がないからであろうと思われる。親兄弟の同意せぬ恋愛結婚などはまして遂行すべくもない薫である。十九になつた歳としに三位の参議になつて、なお中将も兼ねていた。帝も後も愛を傾けておいでになる人で、臣下としてこれ以上幸福な存在はないと見られる薫ではあるが、心の中には純粹な六条院の御子と思われぬ不幸な認識がひそんでいて、楽天的にはなれない人で、貴公子に共通な放縦な生活をするようなことも好まなかつた。静かに落ち着いたものの見

方をする老成なふうの男であると人からも見られていた。兵部卿の宮の恋が年とともに態度の加わる院の一品いっぽんの姫宮も、一つの院の中にいる薫には、ことに触れて御様子がわかりもするのであって、評判どおりに優秀な御素質の貴女らしいことを知っては、こんな方を妻にできれば生きがいを感じることであろうと思うのであるが、院が御実子同然な御待遇を薫に与えておいでになるものの、姫宮との間だけは嚴重にお隔てになるのを知っているのは、しいて御交際を求めにゆく気にはなれないのであった。自分ながらも予期せぬ恋の初めの路みちに踏み入るようなことがもしあつては、宮のためにも、自身のためにもよろしくないと思つて、親しもうとは心がけなかつた。

人に愛さるべく作られたような風采ふうさいのある薫かおるであつたから、
かりそめの戯れを言いかけたにすぎない女からも皆好意を持たれ
て、やむなく情人関係になつたような、まじめには愛人と認めて
いない相手も多くなつたが、女のためには秘密にするほうがよい
と思つて、皆蔭かげのことにしておいて、無情だと思われぬ程度にだ
れの所へも人目を紛らして通つて行くのを、女のほうではかえつ
て気が詰まるように苦しく思い、薫の誘うままに三条の母宮の所
へ女房勤めに集まつて来るのが多くなつた。冷淡な態度を始終見
せられているのも苦痛ではあつたが、絶縁されるよりはと心細い
恋人たちは思つて、女房勤めをする身分でない人々もこうして薫
とはかない関係を続けることで慰んでいたのであつた。さすがに

なつかしい、目に見るだけでも情感を受けられる人であったから、どの女もしいてみずからを欺くようにしてこの境遇に満足していた。

「宮様の御存命中は毎日お目にかかることを怠らないつもりだから」

と薫中将は言っていた。こんなふうの人であったから、夕霧の右大臣もおおぜいある娘の中の一人は匂宮へ、一人はこの人の妻にさせたいという希望は持つていても、言いだすことをはばかっていた。なんといいつても内輪どうしのことであつて、世間の聞こえもおもしろくないとは大臣も知っているのであるが、この二人のすぐれた貴公子に準じて見るほどの人もない世の中ではしかた

がないと考えられるのであつた。雲井くもいの雁夫人かりの生んだ娘たちよりも藤典侍とうてんじにできた六女はすぐれて美しく、性質も欠点のない令嬢なのであつた。劣つた母に生まれた子として世間が軽蔑けいべつして見ることを惜しく思つて、女二の宮が子供をお持ちになることができずに寂しい御様子であるために、六の君を大臣は典侍の所から迎えて宮の御養女に差し上げた。よい機会に二人の公子に姫君の気配けはいをそれとなく示したなら、必ず熱心な求婚者になしうるのであろう、すぐれた女の価値を知ることがは、すぐれた男でなければできぬはずであると大臣は思つて、六の君を後の候補者というような大形おおぎような扱いをせず、はなやかに、人目を引くような派手はな扱いをして貴公子の心を多く惹ひくようにしていた。

御所の正月の弓の競技のあとで、左大将でもある夕霧の大臣の家で宴会の開かれるのを、大臣は六条院ですることにして匂宮にも御来会を願っていた。賭かけゆみ弓の席には皇子がたの御元服あそばしたのには皆出ておいでになった。后きさきばら腹の宮は皆気高けだかくお美しい中にも、風流男みやびおの名を取っておいでになる兵部卿の宮はやはりすぐれて御風采ふうさいがりっぱにお見えになった。第四の皇子は常陸ひたちの太守でおありになるが、この方は更衣腹こういばらで、思いなしかずつと見劣りがされた。例のことであるが勝負は左ばかりが勝ち続けた。例年よりも早く競技は終わって左右の大将は退出するのであったが、匂宮、常陸の宮、后腹の五の宮を大臣の大将は自身の車へいっしょにお乗せして帰ろうとした。薫は負け方の右中将で、

そつと退出して行こうとしていた車を、大臣は、

「宮様がたがおいでになるお送りにおいでにならないか」

と言つてとどめさせて、子息の衛門督えもんのかみ、権中納言ごん、右大弁そ

のほかの高官をそれへ混ぜて乗せさせて六条院へ来た。

やや遠い路みちを来るうちに雪も少し降り出して艶えんな氣のする黄たそが

昏時れどきであつた。笛などもおもしろく吹き立ててはいつて行つた。

六条院は、ここ以外にはどんな御みほとけ仏の国でもこうした日の遊び

場所に適した所はないであろうと思われた。寝殿の南の庇ひさしの間の

端に定例どおり中将が南向いて席につき、北向きに主人の座に対

して来会者の親王がた、高官たちの席が作つてあつた。酒杯が出

て夜がおもしろくなつたところに「求もとめこ子」が舞われた。左の手で

抑え、右の手で抑えて幾度か袖を斜めにするこの時の風の動きに庭の梅の香がさつと家の中へはいつてきて、源中將が身に持つにおいを誘うのも艶な趣のあることであつた。わずかな透き間からのぞく女房なども、

「闇はあやなし（梅の花色こそ見えね香やは隠るる）」という時間にもあの方のにおいだけはだれにだつてわかります」

と言つて薫をほめていた。大臣もそう思つていた。容貌も風采も平生以上にまたすぐれて見える薫が行儀正しく坐しているのを見て、

「右近衛の中將も声をお加えなさい。あまりに客らしくしているではありませんか」

と
言
う
と、
感
じ
の
よ
い
ほ
ど
の
中
音
で、
「
神
の
ま
す
」
な
ど、
求^{もとめ}
子^こ
の
一
ふ
し
を
う
た
つ
た。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月10日44版を使用しました。

※「一品」のルビは底本では「いっぽん」となっていました。が、「勾宮」以外の作品では「いっぽん」で統一されていましたので直しました。

入力：上田英代

校正：高橋真也

2003年8月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

匂宮

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>